岐蘇林業

大正五年三月二十五日　第七拾七號　（毎月廿五日定期刊行）　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

目次

▲研究
落葉松種と苗木に就て

▲調査
醋酸石灰製造に就て

▲論說
林政上の諸問題
死學ル驗して活學せよ
林業家として渡鮮する人に

▲雜報
校友會記事
會員消息
其他

研究

落葉松種と苗木に就て

大日本山林會特別會員　中村子之作寄

大日本山林幹事長田中芳男翁予に與へた詩に曰く日本五名木。須推落葉松。々柏中無類。蕃生在信濃。實に本邦中落葉松は我が信濃が本場である落葉松は一名を富士松とも呼ぶ富士山にも其大森林があるを以てなり我が信濃諸高山は何れも富士火山系で之れを富士火山帶と稱す此富士火山帶の落葉松は其成長力、材質濕乾、伸縮耐久力等全世界に分布する落葉松と名付くべき九種類中第一等の優良木で彼の北米オレゴン州の通稱オレゴンパインと等しく彼は大陸に豐富の大森林を成し我は豆大島國に僅少の部分に限り成育して居るのみであつたから漸く明治聖世の御代に至り世に現れたのであるが材質世界的の良材で成長力速成であるから本邦中火山帶に特に東北地方諸高山及び種子の多くは先進文明諸國に多く輸出せらる如斯樹木であるから其原生地卽ち種子を採る母樹林は如何なる所にどんな樣に生へて居るかとは人々の聞かんとすることである我輩も常に聞かるゝから其大略を述べて見よう、信濃には七八千尺以上の山が幾つもあるが何れも本邦脊髓線をなした富士山と同ゞな死火山で其七八千尺或は一萬尺以上の高山に於ける海拔四千五百尺位迄は赤松の天然生があつて夫から僅かの間が赤松落葉松の混交林で山の日陰の方はコメツガ白ビソ、ミヅメ其他矮少なる灌木類の下木の混交林となり反りて溪谷の底に至れば落葉松と混交して居る、併して六千五百尺に至れば餘程日向きの宜い所でも落葉松は其跡を斷ちコメツガ、白ビソ、ミヅメ等と僅少種類の灌木となる其間單純落葉松林中の下木に白カバ、ナ、カマド、富士サクラ、ミヅメ、ドウダンツツジ、ヤマブドウ、サネカヅラ、コトリトマラズ、ハウチワカヘデ、シャクナゲ、其他五六種の灌木類と五葉松、ヒメコマツ等の團成林がある又日陰の崩壞地にはオ、バハンノキ、ヤハズハンノキ等の叢生して其間にコメツガ、白ビソ等が更新しつゝある所もある又日當り風當り宜敷崩壞地には落葉松が尻をまくり腕を現し實に近寄り得ざる所に死守して居る所もある又落葉松天然生母樹林の箇所を溫帶寒帶の境界線だと敎へた人があるが兎に角四千五百尺位より六千尺位迄の高地に帶狀をなして天然に成育して居るである前述は重に八ヶ岳字西岳の狀態で其他五六の高山の實踏であるが如斯所にある母樹林から採つた落葉松種子であるから夫れより少し暖い地へ下げて植ゑれば成長力が甚だ速かで植付後二十八年目に末口、八寸の四間材が取れたと云ふ說もあり又元來に於て末口五

六寸の貳間材位なれば珍とするに足らぬ

二、材質及種子

落葉松は東洋一等の建築材にして他樹に敵すべきなし即ち大は船艦家屋橋梁、鐵道枕木電柱鑛山支柱其他土木用材等一切に利用せられ能く水に堪へ負擔力に富み家居を建築するにも土台、柱梁、タルキ、板、屋根板に至る迄皆落葉松一種類を用ひて建設するを得且つ保存期尙ほ百年以上を保つ、樹性他樹の成長し能はざる如き火山灰土加かも粗惡の乾燥地を好み最も能く成長す併して杉檜の成長せざる寒地に適す縣下彼の淺間山麓は古來一木の成長せざる荒野なるに長野大林區署の經營の下に落葉松を植栽し最も迅速に美林をなしたり其他南佐久大澤村有林の如き枚擧に遑あらず

如斯實跡を擧げたる落葉松は信濃以北の各縣下及北海道方面に該種子及苗木等大に歡迎せられ且つ歐米文明諸國へも種子の需用せらるゝ事少なからず隨ふて他樹の種子に比し常に高價なる又故なきにあらず而して落葉松種子は前述の如く需用多きに拘はらず母樹は存外少なく且つ一年豐作なれば翌年は必ず結實せざるを例とす一年置きに結實し眞の豐作は五年目若しくは七年でなければ之れを見る事なし實例を述べれば明治三十三年同三十七年同四十三年大正三年同四年の如し然るに採收法は極めて亂暴にして母樹の枝條を幹部より伐り落し棒木となし甚しきは任意の所から伐り倒す等一度結實すれば農作物收穫の如き取扱をなす故限りある母樹の如斯災害に遇ひ從來の生產地たりし地方は母樹大に荒廢して其生產を見る能はざるに至る如斯して縣下母樹林所在地は採收せざるなきに至れり我が八ヶ岳の一峯西岳の如き余が明治四十三年の發見に係り縣當局の配慮を蒙り御料局木曾支局の許可を得て茲に全山の母樹林より種子御拂下の榮を蒙り採收法に最も注意し母樹の繼續保存に重きを置き採收經營する事となれり

要之に前述の如く結實が稀れで需用が多く毬果の採收法が亂暴であるから年と共に高價となるも又理なきにあらず、實に信濃林業の爲め將國家の爲慨嘆の至りに堪へず即ち明治四十三年以後連年凶作なりしを以て大正三年春に於ては羽根去り壹升量目百六十五匁發芽力三十六七%位の劣等種子價格金七八圓となり羽根付壹升量目七十匁位のもの金貳圓七八十錢以上參圓餘の賣買相場となる

二、種子發芽狀態の優劣

落葉松種子は他の植物の種子の如く常に發芽子葉が二葉とか六葉とかに極まりて居るものでない同ト落葉松の種子でありながら不良なる種子は三葉を以て生れ漸次優良種子に至りては一葉を增し最優良なるものは八葉を以て生る如斯であるから不良種子より生じたるもの卽ち三葉四葉のものは旱天に又霖雨に枯死するもの多く幸ひ生き殘りて居るも三寸以下にしか伸びない、且つ伸びたるものは葉の「ミゴ」又は糸の如く細長く薄弱のものである然るに優良なる種子から生へたものは最初より成長力が盛んで一年に五寸以上八寸或は尺餘にも伸長する事がある卽ち種子の健全優良なるものは良好の苗木を生ずる次第である然るに種子の賣買は唯發芽力の多きを貴び目方の輕重を論せざるは迂も又甚しいと云ふべく一升何程の賣買は双方何れにか損と益とがあり尤も完全なる賣買は一升の目方及發芽率を約束し大粒の目方の重いのを買へば買入の利益である

三、新種子と古種子の素人識別

此の種子は新種子であるか古種子であるか又發芽するかしないか等識別に甚だ苦しむのであるから信用ある種屋から購入するが一番安全なるは勿論であるが今多年の實驗を斯業界の爲め御披露致すべし

(1)落葉松種子は蠶種を蓄藏する風穴等に完全に蓄藏すれば三年間は發芽力を有す年を經るに從ひ漸次發芽力を失ひ六年目に至れば全く發芽力を失ふ

(2)一年古の種子は含有する松脂黃色となり漸次濃黃色となり終に赤黃色となりたるものは假令發芽するとも成苗たる資格なし

(3)一年古の種子は口と筆とに現す事の出來ぬ褪色あり且つ生きたる寄生中壳中にあらず虫の寄生せし種子は虫穴を有し且つ空壳となる又寄生虫の壳中に死したるものは麹の如くなりて居る但し蠶種蓄藏の風穴に蓄藏したるものは寄生虫壳中に生存して居る又壳中より脫出したるものなし

(4)價の高いものであるから變色松脂を去り白い新しい松脂を混入すれば更に空壳を除けば新古何れの種子だか不明のものとなる譯なるが能く注意し顯微鏡にて見れば變色の脂の細末あり又四五百粒も潰して檢れば麹の樣になりたる寄生虫があるから古種子及び古種子混入したる新種子たる事が識別せらる

(5)新種子は一種云ふべからざる光澤あり又寄生虫必ず生存し又空壳なし寄生虫は五六月頃壳に穴を明けて成虫となる故風穴等に蓄藏したるものは一年間生存するものあり

(6)新種子は含有中の脂必ず白色を常とす但し脫種中數日間濡れ莚におくときは少しく黃色の脂となる

(7)新種子は白紙の上にて押し潰せば多量の油を紙上に印するも古種子は僅少の油を印するのみ

(8)小刀にて種子を切斷して壳中に充實するものほ適當の期節に採收したるものにして發芽部合の多少に係らず優良種子なり壳中より實の脫出するものは採收の時期尙早く不熟の種子なりとす、此種子は發芽はしても枯損するもの甚だ多く不良苗となる

(9)羽根付種子と羽根除種子

同じ種子にても羽根付種子の方發芽力多し故に買手の利益は羽根付種子に限る故に本縣林務課は之れにあらざれば採用せず茲に於て双方損益なき賣買は發芽力と目方を約し取引するを要す、

羽根除き種子は遠方へ送るに好都合なるのみ羽根付種子より甚しきは一割の發芽力を減退す

(10)風撰種子と水撰種子

該種子は何れも羽根除き種子に於て行はる風撰種子の極撰は一升量目貳百拾匁迄となり押潰し檢定に依れば九十五六%の發芽力となる

水撰種子は全發芽力となり一升量目貳百拾五匁となる以上二者播種試驗に依れば甲乙更に無し然るに價格の點に至れば前者の約五割高ならざるべからず如斯種子を製造するも又購入するも共に迂と云ふべし

四、苗木

落葉松苗は一回床替にて山行苗となるものを優良とす山地植付後成長力旺盛なり之れ發芽の時多くの子葉を以て生れたるものなればなり

小苗伸長數	量	一回床替山行苗	二回床替山行苗	三回床替山行苗	枯損及不良苗
三	寸	一万本	一千本	五千本	一千本 三千本
四五寸	同	八千本	千五百本		五百本
七八寸	同	九千本	八百本		二百本

右は害虫の被害なき限りの事にして三寸前後のもの最も歩減り甚だ多く加之三寸前後のものは肥料を要し優良苗少なく二三回の床替を要す元苗廉價なりと云ふも山行苗となる迄には頗る高價となる山地移植後と雖も不整にして振はず然るに五寸以上のものは肥沃の畑地は無肥料にて又六七寸以上のものは中庸畑にて殆んど無肥料にて差支へなく山行苗となる但し連行の場合は此限りにあらず要之大正三年四年の如きは各產地最優良種子豐富なるを以て大に信濃林業たる落葉松植栽を盛にすべきなり茲に聊か多年の實驗を記して林業家の一粲に供す

調査

醋酸石灰製造に就て (上)

柳澤得衛

製造順序及方法

(1)負櫓(二斗入)にて各炭竈より運搬されたる木醋液は先づ木醋液貯藏槽(イ)に入れ浮遊したる『輕タール』を掬ひ取り沈澱したる『重タール』は一週間に一回宛除去す。

(2)次に貯藏槽イより濾過裝置(ロ)を通して『タール』及『夾雜物』を除き中和桶に入る

(3)石灰解桶には約一回分位(一石の木醋液に對し約一貫七百五十匁)の石灰を入れ中和桶に出でたる木醋液を以て之を乳狀に解かすべし

石灰の解し方=生石灰を『解し桶』(ニ)に入れ其の上に二升位の木醋液を掛くるときは水分を吸收して漸次粉壞し熱を生ず此の時再び三四升位の木醋液を掛け攪拌し置く時は沸騰し暫時にして復び水分の不足を見るべし此の時更に木醋液を入れ斯くして充分に沸騰せば無塊の乳狀となる然るに最初に木醋液を多く入るゝ時は沸騰遲れ甚だしきは沸騰せざることあり又最初の少量の液を入れたるのみにて暫く放置し風化して後に(熱の冷めたる頃)水を入るゝ時は恰も『カタクリ粉』を水にて緩めず直ちに熱湯を注ぎたると同じくブツ〳〵したる凝結物浮き中和の際過半滓となる若し如斯中和液を以て煮詰むる時は微粒狀の石灰は融解して所謂石灰過剩を來たすものなり。

(4)石灰乳狀となりたる時は之を寒冷沙又は麻袋にて濾しつゝ中和桶にて中和をなす此の時一柄杓宛乳狀石灰を入れ充分攪拌し浮きたる『タール』及『夾雜物』を寒冷沙又は其の他のものにて掬ひ取る然る時は始めは濁りたる赤色を帶び漸次中和する時は稍々黑味を帶び『タール』及『夾雜物』が多く出で其後尙二柄杓乃至三柄杓投入し攪拌する時は黑綠色を呈し赤青試驗紙を入るゝも反應なし之全く中和せられたる證なり若し其中和液が割合に早く澄む時は石灰の少なきを知るべし而して此の時に於ける試驗紙に及ぼす變化は赤紙は一層赤味を增し青紙は赤變すべし又一旦青味を生じ後石灰を入れ紫色或は赤味を呈したる時或は泡沫の多く浮き出でて消ねざるときは石灰の過ぎたのを證するものにして赤色試驗紙を青變し青色試驗紙は一層青味を增す

(5)斯くして中和したる液は其中和桶中にて約三十分間靜止沈澱をなし浮遊物を除去したる後中和液沈澱槽(ホ)に移し此處に於て約一晝夜程沈澱して澄ますべし

(6)澄みたる中和液は煮結釜(ヘ)に入れC四百度位の火熱を以つて常に均齊なる火氣を以て煮結め(若し火力を不平均になす時は液中の醋分放散し石灰過剩となる)將に結晶を初めんとする即ちボーメー氏比重計にて濃度一八乃至二〇度比重一、一六內外となりたる(液の色は濃赤色を呈し粘氣を有し液の量は一石の中和液は約二斗二三升位液の薄きものは五分の一に煮結まる)其瞬間に之を煮結液沈澱桶(ト)に移し一晝夜半位(冷却を度とす)沈澱し『重輕タール』を除去すべし(輕タールは絕ねず除去し重タールは一週間に一回位除去するを要す)煮結の際は最初主として石灰の滓分浮遊し約二分の一位に煮へ結まる時は主に『タール』のみ浮くを見るべし(煮結時間は時期燃料釜の形狀等に依り差あるも一石の中和液は約六時間乃至八時間位を要す

(7)充分『タール』を除去したる煮結液は之を結晶釜(チ)に入れC二百度乃至二百五十度の火氣を以つて結晶せしむ其際釜の緣に附着して結晶したるものは常に注意して掻き落し凡そ三分の一位結晶したる時金網にて笊に掬び上げ漸次火力を弱めつゝ焦付かぬ樣徐々に結晶せしめて二三回位に掻き上げるものとす(結晶時間(6)と同樣の關係にして一樣ならざるも約七八時間を要す

(8)笊に上げたる結晶物は充分に兩路切りをなしたる後之を鐵板乾燥器(リ)に掛け火力をC百四五十度內外にて約二十分位毎

に一度攪き均し半乾燥となし之を二分目位の篩に掛け枠に入れ乾燥室(ヌ)の棚に推し入れ室內の空氣の溫度は約C百度位とし此處に於て充分に乾燥せしむ(手にて堅く握り固まらざるを度とす

(9)充分に乾燥したるときは之を麻袋に(正味十貫又は十五貫目)入れ(本京市本所區柳島橫川町日本醋酸製造株式會社宛)發送す

(10)以上は製造方法の概略なるも注意すべき二三要點を摘記すれば

(イ)中和の際は充分に攪拌しつゝ石灰を混和すること

(ロ)煮結の際は常に熱度を均齊に保つこと

(ハ)煮結の度は將に結晶を始めんとする瞬間卽ちボーメー氏比重計にて示す比重一、一六內外なるを要す

(ニ)結晶釜に入れたる時は常に火力を加減し焦げ付かゝる樣注意すること

(ホ)仕上げ乾燥は充分ならざる時は品質を害し價格を減ず

(ヘ)絕へず『タール』の除去に注意するは最も肝要のことなり

醋酸石灰の價格

(但し大正四年五月二十二日以降にして東京日本醋酸製造株式會社に於て發表せるもの)

一、純醋酸石灰七十五%以上を含有する品は八十%に換算し東京日本醋酸製造株式會社着一貫匁に付き金四十六錢なりとす

一、同 七十%以上七十五%未滿を含有する品は 同金四十錢

一、同 六十五%以上七十%未滿の品は購入見合せる品は 同金三十六錢

一、同 六十五%未滿の品は購入見合せ

此の外當分奬勵金二錢及特別奬勵金七錢(八十%に換算)を附しあり而して右の價格は時々變動することあるは勿論なり

試驗結果

一、奧行一丈橫六尺高サ七尺の炭竈に於てブナ生木を資材として 一四五三(二石當り七三四六〇)之より出來たる木炭 百二十六貫九百三十匁(但し白炭)

木醋液の採取量 三石六斗七升(但し平均含有%五、一にして裝置は七寸土管三十五本なり

一、同 竈に於てトチ生木を資材として 九百一貫九百匁

一千五十二貫六百匁 一千五百匁之より出來たる木炭 九十六貫九百五十匁

木醋液の採取量 二石八斗三升(平均含有%三、七なり)

一、奧九尺橫六尺高さ六尺の炭竈に於てブナ生木を資材として 五百五十九貫百五十匁

木炭出來高 八十五貫六百匁

木醋液採取量 二石三斗五升(但し平均含有量五%にして冷却裝置は六寸土管三十本にす)

一、平均木炭百貫匁に付要する資材及木醋液流出量に付き

木炭百貫匁

資材(生木)八百二十貫

木醋流出量 二石八斗六升

一、木醋液一石より出來る醋酸石灰量及之に要する石灰の量

木醋液一石(濃度三、五比重一、〇二五含有 五、九)之に要する消石灰 一貫七百十匁

煮結液量 二斗三升(但しボーメー氏示濃度二十度比重一、一六)

製品出來高 三貫二百五十匁

製造方法は(イ)(ロ)(ハ)番號の順序にして焚口(カ)は前の煮結釜(ヘ)の三ケ所と兩側の結晶釜(チ)を二ケ所等而して前の

煮結釜の眞中の焚口にて焚きたる煙は地中を六寸土管半分のものにて奥にある煮結釜に引き前の兩側の煮結釜の焚口にて焚きたる煙と共に地中を二本接七寸土管にて乾燥鐵板の下に入り結晶釜の焚口にて焚きたる煙は別に二本接六寸土管にて地中を通して亦乾燥鐵板の下に入る而して結晶釜と結晶釜との焚口に關係なし

鐵板乾燥器（リ）は緣三寸宛にて幅二尺四寸に長さ五尺四寸のものにして鐵板の下は深さ一尺程の『ムロ』となりて前部の二ケ所の『ムロ』は各六寸土管の半分のもの二本宛にて後部の一鐵板の『ムロ』に通ず此の廢煙を土管（七寸經）にて地中を通ずて乾燥室（ヌ）内中央に表はれ屋根を貫き煙突となす

乾燥室の裝置は恰も蠶具の拾枚棚の如きものにして之を使用する乾燥枠も同樣蠶籠の如く鐵板を二尺八寸四方に二寸緣のもの二棚ありて其棚間は前記煙突の貫通する所に該當す。

醋酸石灰一日の功程二十貫三百匁よりの收支計算は左の如し

一、採液費　七石（一石三錢の割）二十一錢
一、木醋液七石の運搬賃（平均一斗一錢一厘距離は最長三百五十間最短十間平均二百間位なり）　七十七錢
一、石灰十二貫代（一貫目七錢）　八十四錢
一、燃料（層積七十二立方尺）　六十五錢
一、製造費（男一人女二人）　九十錢
一、荷造費　五錢
一、製品運搬費（一貫目二十錢但し事業地より柏原驛迄三里半を廿貫三百匁運ぶ）　四十錢
一、柏原驛より醋酸製造會社迄の運賃　五十錢
（十貫目二十五錢として）
計　四圓三十二錢
一、醋酸石灰（一石より二貫九百目の割にて醋石二十貫三百目一貫四十錢とす）　八圓十二錢
差引利益　三圓八十錢

論說

林政上の諸問題

宇紫生

昔は其領土内に於ける需給關係よりして消極的な林政上の施設をなすを以て足れりとしたのであるから其各藩主は單に森林の造成若しくは林木の保育を以て生命としたのでありうりして其絶對の權限からして其人民の自由を拘束し得た上から少しく將來の經綸あるものは何れも今日に其事績を垂示し得たのであるけれども此世界的にして民權の自由が僻村に迄透徹せんとする、今日の現勢に於てはどうしても積極的に出づる林政上の方針を樹立して進むにあらずんば其勵行と効果は容易に期待し得べからざるものが少くないとは云へまい。勿論森林法上に規定せられたる保安林其他の如き强制的の手段はあるにしても是亦一面に於ては積極的なる經營方法を講ぜしめ得るや明である今茲に掲げんとする處のものは新奇の林政意見でもなければ卓拔なる方案でもない即ち從來取り來られたるものに對する處の出鱈目論である、近頃誌上の諸兄の卓論高議を拜見すると眞面目に個性の自覺やら未來の憧憬やらに及ぶ意議深い!!我々の古い頭では一寸判り難い!!ものが多いから余輩の如き無鐵砲なる放語が或は一興にもならうかと思つて誌上を汚すのである、

一、部落有林野の統一

○古い問題であつて然も其出來る毎に新しい結果を其町村に齎すのが本問題である一体此問題は學者及爲政者が云ふ如く町村の自治及林野の二方面から行くものであるは勿論である、それで此の林野の方面から行くと貴縣はもうだか知らないが本縣の如き北陸の地は町村長は元より郡

長、郡書記等の直接折衝者迄が林業即林野經營を以て農業或は養蠶業等の如く自由經濟主義と同等視する事が抑もの間違であつて愚昧なる村民の言を聞き又は半可通の政治家の說によつて其經營が小なれば小なる程早く且確固たりと思ふ十八九世紀式の頭の下に支配せらるゝ事が不進捗の大なる溝渠を爲して居るのである

○今茲に詳しくは云ふ必要もないけれども社會政策上並に國家發展上に及ぼす影響と貧弱なる農蠶業の奴隷に等しい現在の林業の立場から考察するならば彼等は一日を忽にすべからざるや明である其此れを知らざると知つて知らざるを眞似するのは漸次官吏根性と、御都合主義と、眼前主義と、エゴクズムの益々旺なる證左であつて余輩をして政治家たらしめば國家の將來を如何せんや位の切齒扼腕ものである、

○町村自治の方面から行くならば統一の出來ないのも無理がないと云ひ度なる何故かと云へば其多くの町村民は否部落民は法律の呪咀者であり國家の破壞者であるからである、町村制上の規程がどの程度迄行はれて居るか因襲とか慣習とかの下に隱れて自らの部落と自らの町村を破壞しつゝあるのではないか或人は夫れは現在の町村當事者と町村民とを餘りに高く買被り過ぎた所論であると云ふ成程知らざる彼等をして其斯かる狀態にあらしむる罪は或は政府も縣も負はなければならない處があるかも知れないけれども、丁髷を切つて、領土の奉還をした明治維新は已に五十年の昔である、國家が五十年間に驚くべき進歩をして（一寸をかしいが表面から見て）町村が依然たる五十年前に停留して居る矛盾したる國家が何處にあるか、

○彼等町村民が自治に對する狀貌は尙未だに丁髷を頭上に戴いて居ると異ならないのである、誰の町村か、何人の爲の役場か、租稅公課の徵收と戸籍、地籍を扱ふ所が即役場と解するもの多き、現在の多くの町村に眞に部落有の財産統一が出來るのが寧ろ不思議かも知れない、

○勿論自治の方面から見たる統一は人心の統一であり町村内の融和であり團結である、或半可通余に告げて曰く『如何に財産の統一をなすも人心は決して統一せらるべきものにあらず、國家相對待して尙國内の鬪爭の絶ざるを見すや』と余曰く其言當れも即ち現代の狀勢から推斷して即當れも政黨政治とも附かず官僚專制政治とも附かず、人材主義とも附かざる我國の現今の内紛を以て統一の附かずと云ふは過渡時代の當然なる狀勢にして此に對比するは不合理なり然れども夫れから一旦緩急の場合の擧國一致を見ざるか然るに町村の現狀はいざ緩急の場合に當つてすらも尙政治家の蹂躙する處となつて一村に二黨乃至三黨の出現を見る事珍しからず此の如き狀態に於て圓滿なるべき平素の村政が如何にして完全の進展を見得べきか彼等部落てふ城砦に據れる藩閥種屬は現狀の儘如何なる進展を計り得るか人材は都會に引拔かれ資金は都會に集合せられ中心人物なく指導者なき統一せざる町村を現狀の儘放置すべき程無情なる考を有するか」計らずも慷慨叱咤すれば其客は一言をも答へずに去つてしまつた、

○吾人は尙自治の方面からしても眞に町村民に對する同情と指導の熱誠を持して此遂行に努力しなければならないと思ふ。

（此項終り以下次號）

死學を廢して活學を學べ！

岐蘇仙人

我が親愛なる校友會員諸兄！活學を學び浩然の氣を養はんと欲せば大いに自然を友とせられよ。

今や將に春風駘蕩として梢を亘り遠山靄然として霞の中に眠り百鳥囀々として囀啼し陽炎起ち上り綠草將に萠ゑ出で郊外散策の好シーズンは來らんとす此時に際し元氣潑剌たる吾人青年青春の熱血燃ゑ起つ時に當り徒らに陰陋なる屋内に蟄居して一ページ讀んでは一ページ忘れ十ページ讀んでは十ページ忘れ籠で水を汲む如き勉强はすまじきなり是れ益なくして却て害あればなり。かく糞にもならぬ勉强と雖も神聖なる腦髓を用ひざるを得ず腦髓を用ふれば清淨無汚の血液を濁濁消耗す血液は人間活動の元素なり此血液を失へば身躰衰弱するは何人も善く知る所なり。

故にかゝる無益の勉强せんよりは寧ろ郊外に出て遊べ而して飛び得る者は自由に飛び、走り得る者は大いに走れ、歌ふ者は歌ひ、舞ふ者は舞へ、蝶を追はゝ追へ、花をつまば摘め、所謂身神の自由を得よ而して躰力を鍛へよ。

秀靈なる山岳涓々たる溪流喃々たる鳥聲翩々たる胡蝶あゝ眞に美なる哉郊外の天地出でよ眺めよ而して心の爵を晴し浩然の氣を養へ。

ア、自然てふ敎師の敎育する一大學校は吾人の研究を積むべき眞箇の實驗場也。

然り昔より「鳥に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり」と親を養ふ鳥親の枝より下りて止まる鳩はこれ孝道を敎ふるにあらずや群がる雀の語らふは友情のこまやかなるを示すにはあらざるか、鴛鴦の睦ましげに浮べるは夫婦の和を敎ふるにあらずや、蜜蜂の營々として働くは勤勉の範を垂るるにあらざるか蟻の孜々として勤むるは共同生活の模範にあらずや、之に反して夏中遊びくらせし彼のきり〴〵すの枯草の上に死せるは是れ因果應報の理を語れるにあらずや之皆自然てふ良敎師の敎育する一大敎訓にあらずや。

又美麗なる蝶の翼の構造を檢し芳香馥郁たる草花を摘み以て精解審剖し奇石を拾ひ珍貝を採り精密に觀察せば理學思想は此間に涵養せらるゝなり之吾人の研究を待ち佗ぶるが如き實驗場裡にあらずや。

仰いで巍峩たる山岳を眺め俯して澎湃たる水を望み起て雁聲を聞き坐して虫韻を聽かば此間に美的觀念は養成せらるゝなり。

ア、美なる哉郊外の天地ア、奇なる哉自然の美觀。

夫れ學問は書物のみによりて完全なる結果を收め得べきものにあらず卽ち紙で造つた書物を讀み大學といふ建物の中にて敎師の講義を聽くばかりが學問にあらず、活學を學ばんとせば宜しく自然に就いて學べ。

故に吾人は陰翳なる屋内に坐して山紫水明風光明媚の地に遊び千山萬水を隔てたる異境に彷徨し古への聖賢に交はり君子に語り英雄を慕ひ豪傑を吊ふ所謂死學を學ばんよりは輕裝漂然として郊外に逍遙し自然の良師に薫化せられ自然の現象美觀に美的觀念を養成し一事一物一見一聞の實驗に理學思想を涵養し東奔西走一蹴一立以て身躰を鍛練する所謂活學を學ばざるべからず。

余をして叫ばしめよ

天地は一大學校なり自然は一大書籍なり

社會の一切事悉く活學問ならざるはなし活眼を開きて天地人に對する者は到る處に活學問を爲す事を得べし。

宜なり詩仙ウォルゾッス曾て世を誡めて曰く『乞ふ出でゝ遊べ一に自然を師とせよ』

と如何に其言の眞理にして又誠實なるや。

大正五年三月四日北寮第九室紅燈の下に於て試驗勉强の爲めに健腦丸の廣告ろの如くなりしヘッドを押へつゝ一筆を呵す。

林業家として渡鮮せんとす諸君に（四）

星加正雄

然し僕の言ふ所の結婚問題は林業家として渡鮮せんとする諸君全体に希望するのではない故に渡鮮は絶体に妻君連行でなくては成功は覺束ないと云ふのではない只未婚者の爲めに參考として述べた迄のものである前々號で述べた通り朝鮮に於ける結婚は比較的其の効果を認めないので多くは鄕里に業々立ち歸つて配偶を求めると云ふのは朝鮮に於ける內地人一般の求婚法である今僕は語を改めて云ふ必要はない事實が明らかに証明して居るのである。

要するに僕の說は理想の妻君を得んとすれば鄕里に限ると云ふに過ぎないのである扨て渡鮮準備の順序とし次に述ぶるのは荷造り卽ち携帶品である此れは成る可く節減せなければならん家具などは絶体に必要はない衣類の行李に一つ二つ乃至三つもあれば充分である只人の口癖に朝鮮朝鮮と荒れはてた未開地の樣に思はれて居るが仲々どうして今日の朝鮮は決してりんなものではない斯の如き偏狹なる思想家は釜山にでも上陸したら忽ち氣絶するかも知れん本邦唯一なる木曾の山林學校で練磨した技術家であれば決して衣食住には不自由はないだから多額の運賃を拂つて澤山な荷物を持つて渡鮮する必要はない殊に本土と朝鮮間の輸入貨物或は物品に對して稅關とふ難關があるだから荷物は出來得る限り節減せねばならん扨て諸君は愈々奮發せられ先づ釜山に上陸して是非共當夜は此に宿を取らなければならんしたならば敢へて心配する必要はない經濟的なれば僅か七十錢位少し氣張れば紙幣一枚以上客の望む所によつて一宿料三圓位迄ある、

扨て釜山より目的地へ到達するには海路としては汽船の便あり陸路としては鐵路があるが流石朝鮮だけで本國程は八達して居らぬ、之は僕の說明を要さない圖に依つて見れば一目瞭然である、驛より下車して愈田舍へ入り込まんとするに當つて忽ち其の必要を感ずるのは朝鮮語である

元來語學と云ふものは實地研究を要さねばならん只書物ばかりで學んだ語學は實地に適せない例へば會話するに當つてどうなり云ふ事だけは言へるとしても先方の話を聞き取る事は出來ない此れも又僕が說明する程の事でもない既に語學者間に於て證明せられて居る所であるだから渡鮮せんとする諸君に於て語學を研究せんとすれば卽ち實地の研究をせなければならん

實地の研究と云へば譯なく學ばれる樣に思はれるが然う思ふ通りにはならん又思ふ通りになつたならば誰も朝鮮迄行く人はあるまい此れがあつてこそ世の中は面白いのではないか人を支配するのも卽ち思ふ通りにならぬと云ふ此の一理ではあるまいかられ努力し給へ奮發したまへ、我が親愛なる校友諸君よ林業家として海外に發展せんとする諸君よ諸君は尙ほ前途遼遠ではないか、共に助力し以て我が校名をして四海に其の名を轟かさうではないか人生僅か五十年醉生夢死すべきではない見よ彼の歐洲戰亂の影響は日々夜々に日東帝國の惰眠を攪破するではないか國家を脊負ふ所の靑年諸賢よ春は來ると雖も豈安閑として花鳥に醉歌するを得んや戰局の大勢は未だ何れとも確認する事に出來ない一朝獨國をして勝利を取らしめたならば彼我の關係或は修羅の慘劇を演するに至るかも知れないそれ努力し給へ奮發し給へ思ふ儘にならざる世こそ面白い

いではないか

僅ならぬ後期試驗も早や目前に迫つた今日の發表に依ると愈九日から十七日迄だ僕もうつかりはして居られん學期新まつて又諸君と語る事にしよう然し朝鮮は有望だね、諸君、一寸失敬

文苑

和歌

春近く

喜多村黃村

春近く眞白なる御岳につゞく我が家は春近くしてのどかなりけり

あたゝかき陽光をあびて紅梅の春近くして蕾含らむ

美しき人と人とのさゝやきて行くにも似たる春の水流る

春近し春は近づく窓により霞たなびく山々を見る

野に立ちて口笛吹けばこだましぬ幼かりける日のなつかしき

雜報

校友會後聞

加藤由緣

○來年度校友會役員選擧去る二月十九日午前九時より校友會を開き例年の通り來年度校友會役員選擧を行ひたるが出席者百四拾二名にして開票結果（三點者迄）左の如し

庶務部
一四〇票　宮島岩見君
九五票　白木老雄君
三八票　長谷川毅君
一二一票　平田文良治君
一一五票　長坂清人君
二三票　吉川光夫君
一二五票　岩田元吉君
一〇四票　小澤武君
二五票　松嶋長二君
一一七票　藏田穀郎君
九一票　奥村和吉君
六二票　各務傳六君
一一三票　出雲秀一君
九一票　武居章君
五三票　曾我義郎君
一一二票　榊原武重君
九八票　村上美雄君
五一票　岡田籌君

辯論部
一九九票　原治二君
九八票　伊深幾太郎君
五〇票　高峯傳治君

雜誌部
一一〇票　岩見君

擊劍部
一一〇票　宮島君

庭球部
一一〇票　宮島君

弓術部
一一〇票　宮島君

遠足部
一一〇票　宮島君

◉辯論會　役員選擧を行ひたる後本年度最終の辯論會を開きたるが辯士及び演題次の如し。試みに記者短評を贅せん歟。

▲開會の辭、北村顧問先生

▲活躍すべき天地、坂本部長――題名の如し大なる叫び、うが大なる叫びは『今年は辰年だ、活躍せよ、龍は雄飛のシンボルである』と結んだ。

▲寄宿舍生活、平田久良治君――語に曰く『聽者をして傾聽せしむる者は大雄辯家なり。』と眞に然り、いつも乍ら君の雄辯には感服々々。

▲理想の藝術家、吉川光夫君――もと君には妙な喘ぎ癖があつて隨分聽者を笑はせたり、苦しませたりしたものだ。が今日では大分の進境を見せた。當に堂に入れるものと云ふべきか……。

▲活動と人間、三村善三君――登壇一番大のカップになみ〳〵と水をあふつたりの姿は雄なるものであつたが聊か龍頭蛇尾の恨みなしとせず？

▲打たれたる響の流れ、長坂清人君――君に對する皆の批評がこれだ。『すまし過ぎはせぬか』ううだこの演說にもこんなユーモアが流れてゐて君の巧みな辯を傷けはし

なかつたらうか。

▲强盜？、岡西猛君――辯士は本校々友會柔道部設置論者の嚆矢だ。それが他人の家の留守居番に頼まれて睪丸を縮ませたと云ふあどけない滑稽談。

▲『瀧口入道』を讀みて、長谷部久雄君――無理に記者等が押し出した辯士。君が讀んだと云ふ瀧口には隨分記者も刺戟を受けたことがある君の演說は勿論巧みではあるけれども巧みだと云ふよりも、もつと外に、『頭腦が明晰だ』と云ふ點に於て特に聽者をして敬意を表せしめずには置かぬ。

▲吾國民の性癖、松尾廣次君――處女演說だと思つてゐる。辯は確なものであつたが然し先に述べた聽者をして充分傾聽せしめ得たかどうか……。

▲天龍を下つて我葉樣へ、山下不二三君――名文はた手のもの、殊にその動作がよく聽衆を笑はせた。一言するが君のは朗讀演說とか云ふのだつた。

▲盛衰、嶋田德之助君――美しい少女の唱歌を聞くやうな優しいすつきりした演說りんな君が時々大人振ちふとする態度それは又一入可愛らしいものであつた。

▲肉彈の突擊、松島長二君――君が口をとがらせて演壇に立つと會場の隅々からドッドッと云ふ樣な叫びが起つた、が然し落ちついた大膽な演說振りは記者をして快を叫ばしめずには措かなつた。

▲乃木將軍の訓示取次、澤田富可君――こう云ふ演說は君一家の試みで且つ又度々拜聽するところだ。演說としての價値如何は暫くは預りとして偶々墮落せる聽衆を戒め面白がらせる方法としてはよい試みだと推讃してゐく。

▲誠、熊谷清逸君――或は脫線の謗なき能はざるも『舍生としての望み』それは誠の叫びだつたかも知れない……記者はそれの爲に起る煩累を恐るゝものではない。が此處には論究の勞を省くことゝした。

▲雜感、卒業生肥後金四郎君――君の低聲と聽衆の墮落とによつてその論旨を聽取するを得ざりしは記者の遺憾とするところである。

▲舍監として、宮川舍監先生――むしろ『熊谷君の演說を聽きて』であらう。論旨、それは記者の關知するところではない。

▲楠公を作りし偉人、川口勇次郎君――楠公を作つたと云ふ禪僧關山國師を論ず、余が鄕里美濃、伊深の里に正眼寺てふ妙心寺派禪の林がある、記者は未だ嘗て參籠したことがない。が毎年春の彼岸の中日には、開山詣に行くと云ふ善男善女は隨分たびだしいもので今日君の演說を聞いて自分があまりに不注意であつたことに一驚を喫したれで此處に一言告白する次第である。

▲偶感、伊藤芳郎君――君が演壇に立たのは始めてだと思つた。それで記者も餘程丁寧に聽かうとしたが又々聽衆墮落で其意を得なかつたのは遺憾千萬。

▲怒、小田寶君――短氣は損氣或は云々といつた樣な世の道學者流の一場講演式、所謂新らしい人にでも言はせたら戲が生じてゐると位はお手輕な言ひ草、然しまあ結構々々。

○記者が書かうとした短評はみんな記者の感想になつて了つた。これも記者の頭がわるいから致し方がない。いゝ演說も記者の筆に乘つては下手の樣に聞え、多少憎まれ口もきいたが今宵はこれで妄言多謝と結んで擱筆する。

（三月三日夜試驗勉强に追はるゝ人達を前にして、寄宿舍北寮第十二室にて）

會員消息

○岡戸郁治君、暫く滯鄕中なりし同君は今回朝鮮總督府營林廠に赴任せられたり

○松川久吉君、三月一日金澤輜重兵第九大隊第二中隊（輸卒舍第二班）に入隊

○近藤幸吉君、秋田縣本壯小林區署に轉任

○小林哲三君、山形縣新庄小林區署に轉任

○黑崎泮治君、帝室林野管理局札幌支局へ奉職する事となれり

○永井順君、曩に家事上の都合により別子銅山を辭せし同君は最近母校を訪問せられ

たり

○征矢朴郎君、臺中大寶農林部に活動中の同君よりの通信二月末日によれば昨秋より地拵の爲天幕生活を爲し此程に至り全部修了せしが臺灣も旱天續にて昨年九月以來殆ど降雨なく土地甚しく乾燥土人は田作に困難せり事業は樟造林本數九十七万本相思樹直播約八斗にて同部は今後益々發展朝鮮方面へも擴張すべき由臺中は目下菜花滿開郊外散歩の好時節なりと云ふ

○　同窓　卜念神

蘇門を出でゝ三十年、マーシャル　カロリン護謨林王、廿世紀を唸り越す、今年僅かじや百万兩。

蘇門を出でゝ二十年今じや奏任技術官、林野行政治水策、國勢隆々國安し。

蘇門を出でゝ十五年、小倉袴にチョークの粉、二から一引きや一殘る、之ト卜や十五圓安いもの。

フレー〳〵蘇友!!

（右は二月十九日木會通過に際して卜念の投稿する所卜念神の誰なるかは固より知る所にあらず。）

御伺申上候

宇佐美周紫

誌上に於て蘇峽會とか、蘇門會とか同窓の諸君が御會するを聞くは羨望の至りに有之候さりながら僅かに同人二三を擁してメートルを擧ぐるにも無之鐵路遙かに百哩二百哩を馳せ參ずる事も困難にして遺憾の次第に候就ては少し六ケ敷過ぎて編纂の局に當らるゝ方には誠に拜察に餘りある事には候へ共十有餘年後の今日會員諸君の最近の御風貌に接するを得るは最も愉快とする處にしてこは只獨り寫眞によるのみと被存候に就ては記念號御發刊の際各校友會員より近影一枚（家族との連影更らに可なり）並に出てからの歴史（なるべく趣味的に半頁を超へざる範圍）を添へ送附せしめ一冊として一輯の内に蒐められ候へば余輩等の滿足は之に過ぎず候是嚮て繪物語にして母校の懷古は卽ち其連鎖を鞏固なりしむる途なりと被存候勿論經費の如きは蒐集の上通知相成候はゞ差支無之と存候條四月當り御企劃被下間敷や伺ひ上候　不一

第十五回運動會收支決算報告

一金百拾五圓五拾五錢　總收入高
一金九拾壹圓七錢八厘　總支出高

○殘金貳拾四圓四拾七錢貳厘

其後の收支左の通り

一金貳圓　山ッ寄附林檎賣拂收入
一金六圓拾錢　記念エハガキ補助支出
一金九圓　祝賀用提灯蠟燭代支出
一金九圓九拾錢　林友臨時增刊代支出

○差引殘額壹圓四拾七錢貳厘

謹告

一、特撰落葉松翅去種子
一升重量二百五匁八五%以上發芽保證
一、落葉松翅去精選
一升重量百八十五匁六〇%以上發芽保證
一、同特撰翅付種子
一升重量百貳十匁八〇%　發芽保證
一、シホジ種子
一升重量九十匁九〇%　發芽保證

右種子弊店特色の製造販賣に付多少共御用命仰付られ度此段謹告仕候也

製造元　長野縣諏訪郡原村七二八番地　中村子之作
取次所　東京市赤阪溜池町大日本山林會構内　林業協會

大正五年三月廿三日印刷
大正五年三月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫
長野市西後町丙二十一番地
印刷者　田中彌助
長野市西後町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　蘆澤書